一宮西高新聞

発行所
愛知県立一宮西高新聞部
一宮市萩原町串作河田1
電話一宮（68）１１９１
株式会社　大東社
電話一宮（62）１１６８

松清本店
教科書・補助教材・一般書籍・雑誌
文具・事務用品・家具・教材
稲沢市高御堂1-2-1
電話 0587-32-0048
FAX 0587-21-7419

西高生と充実

～スパイスは視野の広さ～

★間もなく今年が終わりますね。この時期になると、今年はどんな事があったのか…と思い起こすことも少なくないですが、皆さんはどうでしょうか。入学、進級、出会い、別れ…人によって様々なことを思い浮かべていると思います。おそらく、ほとんどの人は充実した毎日を過ごし、「気が付けばあっという間だ～！」と感じていると思いますが、もしかしたら…なんとなく毎日を過ごして、「何もしていないけど今日まで来てしまった～！」という人もいるのではないでしょうか。私はこの二つのケースの違いは、毎日の充実度にあるのではないかと考えてみました。充実していれば、なんとなく毎日が過ぎていくことはないと思ったからです。

★そこで、今回は西高の一年生四クラス、二年生四クラス、三年生二クラス、合計十クラス、約四〇〇人にアンケートを取ってみました。一つ目の項目は、「充実しているか、充実していないか」という質問です。これに関しては学年ごとにまとめてみました。見て分かる通り、おおよそ四人のうち三人は充実していると言えますが、ただ、二年生だけが75％を満たしていませんね。誤差のようなものですが、一番だらけているのは二年生かもしれません。三年生が一番多く、一年生が二番目に多いことから考えると、一年生の時には「最初だし頑張るぞう！」という感じで、二年生の時にはいわゆる慣れが来て、三年生で全力を尽くす…というように考えることもできますね。

★次に、充実している人には、「どのように**充実している**か」、充実していない人には、「どのように**充実したい**か」と聞いてみました。充実の種類は以下の六つに指定しました。

①リア充…現実で学習、部活、恋愛、友人関係などで充実している人
②ネト充…インターネット上で友達がたくさんいる人
③二次元で充実…アニメ、漫画によって生活が充実している人
④孤高…一人でも楽しむことができる人
⑤ゲームで充実…ゲーマーの人
⑥読書で充実…読書家の人

結果ですが、双方ともに【リアル充】の回答が多いようです。正直、定義の中に学習は必要なかったと反省しています。西高生なのですから、学習で充実するのは当たり前のことなので、当然回答数も増えてしまいました。それ以外で見ていくと、特に【孤高】【読書】に関しては大きな差が出たと言えますね。充実している人は、【孤高】が9％と高く、【読書】は2％と低い結果となりましたが、充実していない人は、【孤高】が2％と低く、【読書】が8％という高い結果になりました。意外なところで差が出ましたが、実は充実している人の【孤高】の回答のほとんどは三年生だったのです。三年生はひとりでいることが好きな人が多いのかもしれませんね。三年生は受験を控えているので、志望校のことや受験勉強などを通じて、自分と向きあっているから、とも言えますね。充実していない人に【読書】の回答が多かったのは、忙しくて本を読む時間が少ないので、その時間をもっと確保したいという思いがあるからでしょう。こうしてみると、今の西高生の状態を知ることができた良い機会になったと思います！

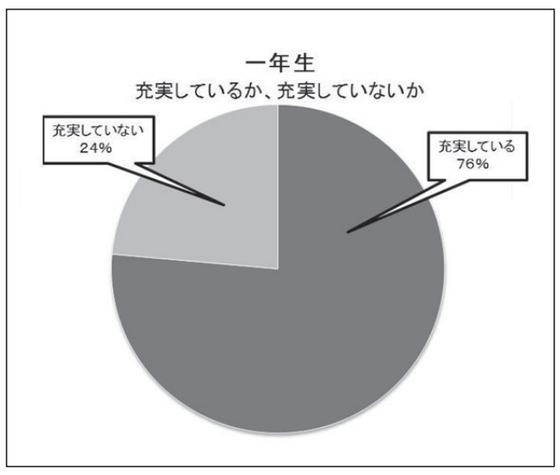
★では、アンケート結果発表はここまでにして、ここからは私たち新聞部の話を交えながら、より生活を充実させるにはどうすれば良いかについて考えていきます。

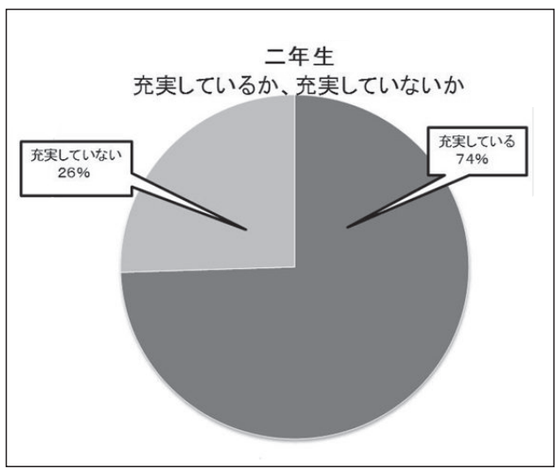
★今年の新聞部は、部長の目から見ても、昨年より充実しているのではないかと思います。まず、人数が増えたことが関係しています。部員数が前々年度は三人、前年度は七人、本年度は十一人と、着実に増えました。それによって、活気が増し、より充実しているように感じました。また、より多くのことに挑戦できました。

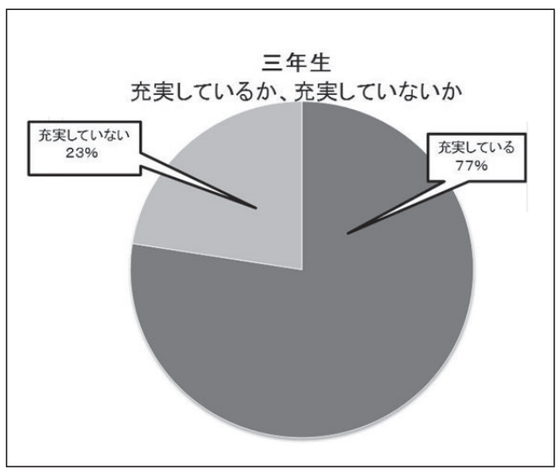
★その例として、中日新聞と共同制作した新聞記事があります。ご覧になった人もいらっしゃるかと思いますが、実際に八月三日の中日新聞夕刊に掲載されました。また、西高祭では新たな企画である「先生これくしょん」や「新聞部特製パンフレット」にも挑戦し、成功を収めました。普段は西高新聞を書くだけの部活でしたが、忙しかった分非常に充実していたと思います。ここで、「それなら、とにかくやる事を増やせばいいのでは？」と思う人もいると思いますが、それでは今までの私のようになってしまいます。

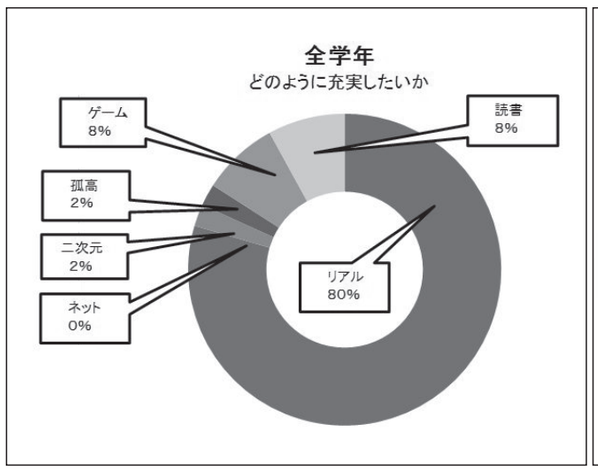
★今までの私は充実していると思っていました。しかし、今思えば、充実した気になっていただけで、充実していなかったと思います。正直、今までの自分をぶん殴ってやりたいぐらいです。先ほど、新聞部では充実していたと書きましたが、それはあくまで部長としての視点であって、私自身がちゃんと充実していたとは言えません。私は何事にも前向きになれないのにもかかわらず、たくさんのやるべきことを自分に課し、それをこなすことで、なんとなく充実した気になっていたに過ぎなかったのです。私は最近、ようやくこのことに気が付きました。しかし、今の私は、勉強面でも日常生活の面でも本当に充実するために毎日を過ごしています。私の場合は、オープンキャンパスや両親との相談を経て、漠然としていた自分の未来について考えるようになりました。自分が無知だと自覚し、調べていくうちに、視野を広げることの大切さを知りました。ふと自分の周りを見てみると、もしかしたら自分は遅れているのかもしれないと気付き、今までの行いを反省しました。それから、自分の考えだけでなく、他者の考えも積極的に取り込んだり、自分以外の人達をもっとよく見て、どんなふうに行動するのか観察したりすることで、考え方にしろ行動にしろ、より自分を客観的に見ることができるようになりました。もし私がもっと早く視野を広くしていたら、もっと今充実していたと思います。

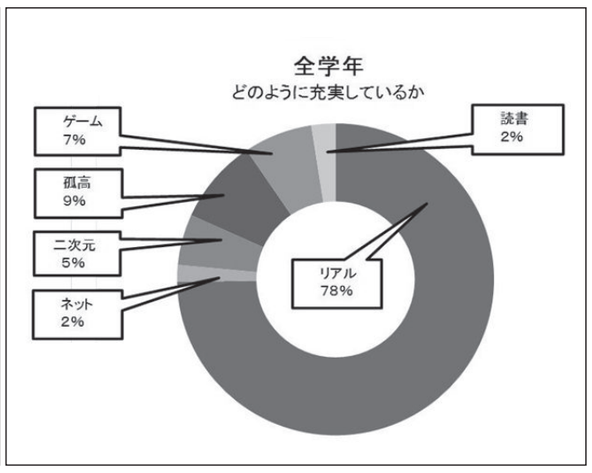
★今、充実していると思っている人も、もしかしたら私のように充実していると思い込んでいるだけかも知れません。これを解決するためにも視野を広くして、周りの人と接し、彼らの考えを自分に活かしていけば、生活は充実し、貴方にとって素晴らしい毎日になるでしょう！　（野口）











部員感想

これから充実した学校生活を送る事ができるように空き時間を活用したいです。（淺沼）

リアルとゲームで充実したいです。ポ〇モン探してきます。（伊藤丈）

今年の新聞部は昨年よりも部として充実していたなと思いました。（加藤）

リア充という概念が存在しない退屈な世界が来たら怖いですね。退屈かどうかは、その時にならないと分かりませんが。（伊藤翔）

実際、充実とは何であるかという事を改めて考える機会ができた。（齊藤）

論説

自動化のミライ（私達は考える葦？）

Ｍｒ・インクレディブルという映画をご存じだろうか。幼少時に見たときの記憶では、パワースーツを身にまとい、超能力を使って戦うかっこいいヒーロー映画だったように思う。特に記憶に残っているのは、車が自動運転になり、その間に変身するシーン。賢い車をかっこいいと思うと同時に、何もしなくても乗っているだけで行きたい場所に行けたらいいなあと憧れを抱いていた気がする。

幼いころ夢見ていた自動運転車。研究、開発が進んだ今日ではもう夢の中の話ではなくなった。最近テレビコマーシャルで、障害物を察知して自動でブレーキをかけてくれる機能のついた車がよく宣伝されている。お年寄りの方は事故をするのが怖いから、と免許を返してしまう場合が多いが、こういった安全装置が付けば安心して車に乗ることができるようになるのではないだろうか。自動ブレーキは自動運転の程度でいえば一番軽いレベル一に相当する。高速道路などで部分的に自動運転をしてくれるものがレベル二、限定的な状況の中で自動運転を行い、システムが要求した場合にのみドライバーが対応するものがレベル三、条件がそろえばドライバーが全く関与しなくても良いものがレベル四、完全にシステムがすべての運転を制御するものをレベル五と、レベルを区分している。（『ウィキペディア《日本政府・米国運輸省交通安全局より引用》より引用』）今のところ日本で実現しているのはレベル一までであるが、政府は二〇二〇年にはレベル四、二〇二五年にはレベル五の実現を目指している。ただ、実現の目処が立っているのはレベル三までであり、技術的にレベル四の完全自動運転の実現はかなり難しいらしい。しかし、着実に研究開発が進められる中でどんどん技術は進化していき、難しいとされている完全自動運転の車に乗れる日もやがてやってくるだろう。生きているうちにそんなことが叶うのなら、どんなにワクワクすることだろうか。

映画や漫画などのフィクションで描かれるような近未来都市の中で生活している自分を思い描いてみてほしい。移動は全自動、コミュニケーションも電子機器で済ませてしまえるし、科学の力で、食材を生み出すことだって容易になる…これは私の行き過ぎた妄想かもしれないが、こんな夢のような世界の入り口に私たちは立っているのだと思う。生きることがとても楽で、自分が消費する体力は極限にまで抑えられる。幸せで、何の不自由もない社会。いいことのように思えるが果たしてそんな世界で、人間は人間らしさを保ったままスマートに生きられるのだろうか。

カトリック教会の「七つの大罪」の一つに「怠惰」という言葉がある。あるＳＦ映画では、全自動化の世界では、努力することを怠り、欲望に忠実に生きた人間たちが皆ブクブクと肥え、考えることを放棄する、そんな描写があった。そんな生き物を人間だと認められるだろうか？私たちは今、そんな〈人間らしさ〉を失いかけている時なのではないかと思う。先程は夢の世界の入り口に立っている、と書いたが、正しくは退化の道を進んでいる、といった方がいいのかもしれない。

人々は効率を求め、「発展」してきた。発展することで、同時に何かを失った。それでも、失うことよりも、新たな時間を手に入れる方が人間には大事なことだった。「発展」は、人間の「衰退」に直結した。現に、衛生的になった町から一歩出て、自然界で暮らしてみることを考えてみてほしい。毒物を見分ける嗅覚もなければ、野生生物をとらえることもできない。水道がない汚れた雨水や川の水しかないような世界で生きられるのだろうか。自然界で生きられないというこの現象は、生物としての明らかな退化だろう。

ＡＩが世の中に進出してきて、仕事がなくなるという話があるが、実際に焦点を向けるべきはここではない。働き口がなくなるのを心配するのであればそもそもＡＩなど造る必要がない。働けなくなることに懸念を示す声がありながらも、研究はストップしない。それはつまり人間は、人間が働かなくてもよい社会を造ろうとしているのではないだろうか？働かない人間が得るもの、それは「怠惰」だ。人間が「怠惰」になるとどうなるのか、極端な話ではあったが、前にも記したように、〈人間らしさ〉を喪失する。他の動物にはない、思考することができる脳を持ったにもかかわらず、それを駆使して得たものがその脳を使わなくても済む世の中とは、なんと皮肉な話だろう。

ここ半世紀で、人間はそれまでに歩んできた速度の何倍もの速さで発展し、同時に衰退の道へと向かった。最近ではまた核兵器だの戦争だのと話題になっているが、地球を、築き上げた文明を、未来を担う人類までをも壊してしまう戦争にいったい何の利があるというのだろう。

「考える葦」であるはずの人間は、目先の、自分の利になることを追い求めた。これが人間らしいと言えばそうなのかもしれない。だが、これでは考える馬鹿だ。葦に例えることは葦に失礼である。なぜなら、人間以外の生物は、未来に自らの種を伝えていくために…すなわち、未来を守るために生きているからだ。一方、素晴らしい脳をもった人間は、自ら破滅の一途をたどっているのだ。

自動運転が生まれることで、人類はどう変わるのだろう。未知の技術にはわくわくするし、発展することは人間の喜びの一つであろう。だが急速に発展している今、人間は自分たちが追い求めているものが何か、もう一度問い直す必要がある。ただ生きることを目的としていたサルだった時代とは違う。そして、人間はその頭を、もっと違うことに使えるはずだ。

頭脳は人間の武器だ。人類はこれをずっと失わずにいて欲しい。憧れが憧れのままでも良い。衰退を止めるのも一つの賢い選択なのではないだろうか。人間は、「考える葦」でありたい。（宮﨑）

作文

十月下旬、台風第二十一号が日本列島に上陸した。台風の影響で、十月二十三日は学校が四限目から始まったので、記憶に残っている人も多いだろう。

また、十月二十二日は衆議院選挙も行われた。今年、選挙権を得た三年生の中には、台風の中、新しい議員を選ぶために投票しに行った人もいると思われる。

さて、皆さんにとって、台風などの自然災害がやってくる事は嬉しいものだろうか。大多数の人は、「学校が休校になるかもしれないから嬉しい！」と答えるだろう。もし、台風が週末に東海地方を通過してしまったなら、月曜日に憂鬱な気分で学校に来ることになると思われる。

実際のところ、筆者もそうだった。だが考えてみてほしい。日本に自然災害が来ることをそんなに軽々しく喜んでいいものなのか。

ここで一つ事実を挙げておく。台風二十一号による大雨の影響で、奈良県および大阪府を流れ、大阪湾につながる大和川が十月二十三日夜に氾濫した。ＮＨＫによると、奈良県斑鳩町は、十月二十三日午後八時四〇分時点、五、八一九世帯一四、〇七六人に避難勧告を出したということだ。

だが、マスコミは、衆議院選挙の速報を報道し続け、大和川氾濫のニュースを報じたのは日をまたいでからだった。ちなみに、大和川氾濫に気づいたのは川の付近に住む一般人のみで、情報はツイッター及びＳＮＳ上でしか広まらなかった。

このことにも怒りを覚えるところだが、今言いたいのは〈自分の発言をもう一度考えてみる〉ということである。

例を挙げると、床上浸水し、電化製品や家庭製品が使えなくなった家庭もあれば、商品が売り物にならなくなった商店もある。その上、お年寄りにとって、夜遅くに避難するのは体力的に厳しい。特に子どもたちは、目の前で溢れだした川を見てどんなに怯えたことだろうか。

自分は安全だからと言って、安易に「台風来てほしい」などと口に出してはならないのだ。今、実際に苦しんでいる人がいるかもしれないのだから。（伊藤翔）

計量器・ＯＡ機器
事務・学用品・書籍
紙徳商店
一宮市萩原町萩原
TEL 68－0034
69－4121
FAX 69－2466

Sports Uniform
Bag / Luggage
企画・製造販売
株式会社 水野繊維
http://msmizuno.jp
〒454-0004
名古屋市中川区西日置二丁目15番17号
TEL（052）331－3077
FAX（052）331－3127
E-mail info@msmizuno.jp

すくーるフォト♪
スクールあるばむ
恋人はサンタクロース
稲沢市祖父江町
石田写真館
0587-97-0059

お昼休みに
手作りパンの販売をしています。
ふれあいサロン
さん・さん萩原
一宮市萩原町中島字番所48-1番地
☎0586-69-3388

西高祭第52回九群九色みんなで力を合わせ（52）目指せ優勝 Go to champ!!

文化祭

九月六日、七日、八日に、西高祭文化祭が実施された。

文化祭一日目は弁論大会が行われた。弁論大会の前に、「タイムフライズ」による西高祭テーマ曲「crest」が披露された。その後、一次選考を通過した五人の弁士が、熱き弁論を繰り広げた。スピーチ原稿を破り捨てるパフォーマンス、聴いている者に訴えかけるような言葉に皆惹き込まれた。弁論大会終了後は、二日目のための準備を行った。

文化祭二日目。九時（食品は十時）の営業開始まで、最後の準備や調整に追われ、緊張と慌ただしさに包まれた。営業開始直後から、人気のクラス企画には行列ができた。西高中が熱気と活気に満ち溢れていた。

食品バザーでは、外国の料理や修学旅行の味を再現した料理などがあった。どのクラスもデザートにもこだわっていて、整理券や当日券の列に並んだ甲斐のある営業ばかりだった。お昼時には、廊下までもがお客で埋め尽くされていたが、皆笑顔で美味しそうに食べていた。

物品バザーでは、日用品や本に加えて、体育祭の写真を用いたグッズも多く販売されていた。各クラスが、それぞれのテーマに合わせたものを集めて販売していた。

ゼミナールでは、内容だけでなく、室内のレイアウトや待ち時間にも気を配り見に来た人を飽きさせないようにしていた。クイズに答えたり投票するなど、参加型が多く、大変楽しめた。

バラエティーでは、お客を楽しませることを目標に、内容、内装、接客の仕方などにこだわっていた。文化祭の時間帯の半分が、営業の係だというクラスもあった。

劇では、演劇部にも負けないほどのクオリティーで観客を感動と爆笑の渦に引き込んだ。

部活動発表では、文化部が生徒や保護者の皆さん、来場者の皆さんに日ごろの成果を見せようと展示や発表や体験を行った。美術部は、作品を展示し、可愛い絵柄の栞などを販売していた。国際関係部は、名古屋大学から留学生を招き、留学や外国についての紹介をしていた。自然科学部は、昨冬の発表会で発表した研究について展示、説明をしていた。茶華道部は、オリジナルのお菓子と共にお茶を振る舞っていた。新聞部は、西高新聞の号外の発行と先生コレクションを展示した。

文化祭三日目。前日の熱気に学校が包まれたまま西高祭は最終日を迎えた。

お昼を過ぎてからは、食品バザーのラストオーダーが近づいている事を知らせる声や、ゼミナールやバラエティーの案内の声が校内に響き渡った。

物品バザーでは、在庫を放出し均一セールを行った。特に印象深かったのは、一円セールとじゃんけんに勝てば無料になる企画だ。箏曲部は、古風な曲から現代的な曲まで美しい音色で奏で、集まった人たちを感動させていた。演劇部は、演技力、衣装、道具、音響、照明で劇クラスとの差を見せた。

そして表彰式。

食品部門優勝　三―七、
物品部門優勝　三―五
ゼミ部門優勝　三―六、
バラエティ部門優勝　三―四、
劇部門優勝　二―七、
ポスター部門優勝　二―七、
弁論部門優勝　三―六、
総合優勝　二―七、

という結果となり、例年に比べ、二年生クラスが強かったと思う。

最後になりますが、西高新聞号外発行、先生コレクション作成にご協力頂いた皆様本当にありがとうございました。（大森）

体育祭

晴天の下、私たちの体育祭は始まりました。例年よりも短い期間での準備だったということで、マスコット、衣装、リーダーなどなど各部署はいつも以上に大忙しだったように感じました。

急ピッチで進められた準備も本番が近づくにつれて、みんなのやる気が増していくように感じ、最終的には無事各部署の準備を終わらせて体育祭本番を迎えることができました。

体育祭一発目の九百メートルリレーでは、転倒したり、バトンを落としたり、激しい順位変動があったりと盛りだくさんでした。リレーから始まった体育祭はその後はどの種目も見どころで一杯でした。

その後も種目は続いていき午前最後の種目であり、西高祭体育祭の目玉でもある『リーダー発表』はどの群団も完成度の高いものばかりで、目が離せませんでした。

皆が力を合わせて物理的に文字通り宙を舞うダンス、前半女子が身に着けていたものが後半では男子の装飾に変化する衣装、グラウンドの反対側まで音を届ける迫力の太鼓とドラムなど、全部署の集大成と言える『リーダー発表』は盛況のうちに終わり、白熱の体育祭も残り半分を告げました。

午後からは綱引きの後半戦や群団別リレーなどが行われ、そこでも沢山の物語が紡がれていきました。しかし、物語には必ず終わりがある様に、あっという間に体育祭は終わってしまいました。

結果発表ではそれぞれが想像するものとは違う結果となり、納得がいっていない人も少なからず…それでも終わってしまったものはしょうがない。次の文化祭へと気持ちを切り替える西高生徒を見ながら、慌ただしい青春はこれからも続くと、ひそかに思う西高祭、体育祭でした。（齊藤）

弁論大会優勝者

三年六組　井口翔太君
「大切なのは第一印象…じゃない！」

後期生徒会

後期生徒会役員にアンケートをとりました！前期とは変わって全員男子役員です。後期最大行事の予餞会などを先頭に立って盛りあげてくれる方々なので、協力してより良い西高にしていきましょう！

①学年・組・名前
②部活動
③座右の銘
④冬の楽しみ
⑤意気込み

《会　長》

①二年七組　神谷　颯太
②剣道部
③明日は明日の風が吹く
④温かい鍋
⑤話は面白くないですが、一杯がんばります。

《副会長》

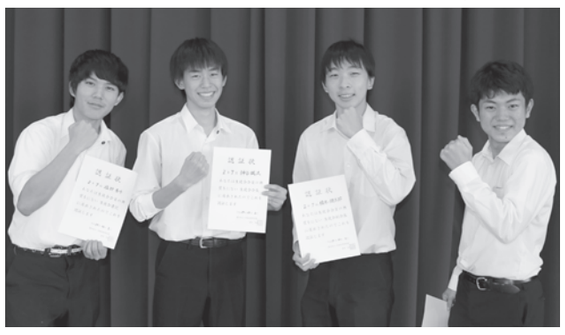
①二年七組　橋本　健太郎
②放送部
③物は考えよう
④正月のお笑い番組
⑤生徒の皆さんがより過ごしやすい学校にできるよう頑張ります。

《書　記》

①二年七組　塩野　秀斗
②放送部
③滅私奉公
④筋トレ、ランニング、フィリピン旅行、バドミントン、お泊まり、ボルダリング、クリスマスプレゼント（親から）、年越し餅、ラウンドワン、年越しジャンプ、ダイエットの達成
⑤任せろ!!僕らに!!

《会　計》

①一年五組　林　佳佑
②剣道部
③日進月歩
④こたつに入ってぬくもりを感じながら寝ること（その後風邪を引く）
⑤生徒会唯一の一年生ですが、先輩のみなさんと一緒にがんばっていきます。よろしくお願いします!!



塩野秀斗君　神谷颯太君　橋本健太郎君　林　佳佑君

MY SCHOOL DAYS

Y君のこと

林　英之 先生

新聞部の生徒から高校時代のことを書くように頼まれて、引き受けたものの、何も書くことがなくて困ってしまった。私の母校は岐阜市にある長良高校であるが、勉強もそれほど熱心にしたわけではないし、部活も全員加入でなかったので、どうしようか迷っていて、入りそびれてしまった。クラス役員の仕事や学校の行事も適当にやっただけである。友人も少なかった。何となく過ごした高校の三年間であった。

そのうち何か書けるだろうと思って、半ば忘れかけていたところ、ある土曜日の夜、中島みゆきの「二隻の船」（にそうのふね）を聴いていて、突然、Y君のことを思い出した。ちなみに「二隻の船」は、「本当の絆とは何か」をテーマにした中島みゆきの代表曲である。こんな話を高校生にするのは適当だとは思わないが、何故か他のことを書く気が全くしない。だいたいストレートに前向きな話を私に期待するのは、古代ギリシアを代表する悲劇詩人のソフォクレスに喜劇を書くことを頼むようなもので、そんなことを頼む方が間違っている。

私とY君は、同じ岐阜市内に住んでいたが、場所はかなり離れているので、彼と始めて出会ったのは、長良高校の入学式で同じクラスになった時であった。しかも、二人が長良高校に入学したのも偶然であった。岐阜県ではこの年から学校群制度が導入され、第一群と第二群の合格者の中からそれぞれ半数が、本人の希望とは関係なく、長良高校に割り振られたのであった。しかも、従来の入試制度であれば、私は多分、別の高校へ進学していたはずである。

さて、一年生の時はクラスに恵まれて、何人かの友人がいた。その内の一人がT君で、彼とは三年間同じクラスであった。T君は、当時、長良高校の隣にあった岐阜大学の教授の息子で、成績は学年トップで、京都大学に進学し、現在は某私大で教授をしている。他に親しい友人がいたこともあり、Y君とそれほど親しいわけではなかった。二年生では、クラスが変わって、一年の時に親しかった友人の多くは別のクラスになってしまったので、クラスになじめず、T君ぐらいしか友人はいなくなってしまった。ちなみにY君も別のクラスであった。

三年になってY君とまた同じクラスになり、しばらくして急に親しくなった。彼とは帰る方向が同じなので、毎日、話をしながら途中まで帰ったものだし、文化祭の時は二人で一緒に展示を見て回った。なにぶん四十年以上も前のことなので、記憶が薄れている部分も多いが、私と彼は親友であったと思う。

しかし、高校卒業後、彼は関西の私大に進学し、私は地元に残った上に、いろいろなことがあって、二人の関係は途絶えてしまった。その後、クラスの同窓会が二回ほどあったが、彼の姿を見かけることはなかった。

私がY君と再会したのは、高校卒業から三十年後の長良高校の卒業生全体の同窓会の場であった。学校の卒業生全体の同窓会は、参加しても知っている人がほとんどいなかったりするので、それまで参加したことはなかったが、この年は我々の学年が同窓会の幹事を務める年であり、案内状の幹事の中に彼の名前があったので、参加することにした。その時の話では、彼は大阪の方で就職し、そちらで暮らしているとのことであった。だが、二人とも他の人達とも話をしたりしたので、じっくり話をすることもなく、分かれてしまった。

そして、さらに十年の歳月が過ぎた。ちょうど一年前、私は帰宅する途中であったが、名鉄電車が岐阜の駅に着いた時、私を呼び止める声がした。振り返るとそこにY君の姿があった。一目でY君であると分かった。彼は私とは違って、たいそう若く見えた。まるで、松任谷由実の「卒業写真」の歌詞にあるように、高校を卒業した頃の面影そのままだった。彼の話によると、彼はある事情があって、今は岐阜の方に戻っているということであった。しかし、彼は急いでいるようで、少し立ち話をしただけで分かれた。その少し後、同じような場面で再び彼と会った。その時は前回以上に彼は急いでいて、二言三言話をしただけで分かれた。電話番号ぐらい聞いておけばよかったが、またすぐに会うこともあるだろうと思って、それをしなかった。それから一年がたとうとしているが、彼と再び会うことはなかった。

今から思うと、高校を卒業した時に、何らかの方法でY君とのつきあいを続けていれば、彼とは生涯の友となれたはずである。いろいろ事情があったにせよ、それができなかったことが、いや、それをしなかったことが、実に残念であった。

郷土歴史

トヨタは走る　どこまで走る

ガッシャンガッシャンと町に響く、機織りの音。エンジンをふかせて走る、車の音。どちらも今日では静かになっているけれど、機織りと自動車こそ、愛知県を代表する産業でしょう。ところで自動車会社と言えばどこを思い浮かべますか？やっぱりトヨタですよね！

台風の雨風に煽られながら、私たちは名古屋市西区のトヨタ産業技術記念館へ足を運びました。中に入るとまず目に飛び込むのは巨大な機織り機です。皆さんご存知でしたか？トヨタは当初、機織り機を製造する会社だったのです。そこから蓄電池やエンジンに発展して自動車に取り掛かったのです。さて、機織り機といえば冒頭に挙げたあの耳に残る大きな音ですが、この機織り機は回転する力を利用するため、衝突が起こらずに音が静かです。しかし開発された当時はセンサーのような技術が無かったため、糸が切れてしまうのを常に監視している人が必要でした。なので「不完全なモノを世に送り出すわけにはいかない」と、この機械は試作品の段階で終わってしまいました。ですが安心して使うことができる商品をお客様に提供するというトヨタの信条を表す存在として、今もなおメインホールに堂々と残されているのです。この機械を発明し、先の「不完全なモノを…」という言葉を口にしたのは他でもない、トヨタグループ創始者の豊田佐吉です。彼は「郷里と国家の貧乏を救いたい」と郷土愛を燃やし、発明に没頭したのでした。そろそろ展示場に入りましょう。すると聞こえてきます。あの機織りの音。すぐに耳が満足を覚えてしまいました。辺り一面には佐吉や様々な国から生みだされた繊維関連の機械がずらりと展示されています。糸紡ぎの実演やボタンで動く機械もあり、充実した展示でした。

繊維機械の展示場を抜けると、なんとバイオリンの音色が聞こえてくるではありませんか。こんな場所で演奏するのは一体誰なのでしょう？忘れないでください、ここはトヨタであることを。そうです、ロボットです。愛くるしい目で「ボクと遊びマショウ」と話しかけてくるわけではありません。各部分が精巧に作られているのです。人間と同じように指を細かく動かすことができます。金管楽器を吹けるロボットもいました。今後介護の場で活躍することが期待されています。

続いては自動車についてです。トヨタの自動車産業を立ち上げたのは、佐吉の息子である豊田喜一郎です。日本の自動車産業が海外に遅れをとっている中、喜一郎は国産自動車づくりに励んだのです。彼は思いついたらすぐに設計図を書いたり、仲間たちに「失敗は心配するな。オレが引き受ける。」と言ったりしていて、自らが開発に積極的であり人望が厚い人間でした。国産自動車を走らせるのだという彼のまっすぐな情熱がトヨタ自動車の原点だったのです。さて、自動車の展示場ではとても広いスペースに様々な種類の歴代の車が並んでいます。さらに製造工場の大型機械も設置されていました。動くのですよ、これが！中でも巨大なプレス機が強く印象に残っています。手元にあるボタンを押すと、ずっしりと響く音をたてて巨大な機械が稼働します。とても興奮しました。出口の前ではまだ世には出ない最新の車がありました。一体自動車はどこまで進化してしまうのでしょうか。

その後、私たちはノリタケの森へ寄りました。そこでは美しい風景画を鑑賞したり、ブランドの陶器を見たりしました。そしてノリタケは環境保護に力を入れていることを知りました。ここでふと、先ほど見学してきたトヨタの産業を思い出しました。かつて苦労して作り上げたエンジンも、今では環境への配慮で姿を変えています。電気や水素の力を借りて、今日も走り出すのです。限りある資源を大切にして自然を壊さないようにしながら、新しい技術を生み出していく。それが人間の役割なのかなと思いました。（伊藤丈）

環状織機：「研究と創造の精神」を伝えるシンボル。実際に稼働するところを見学できる。

トヨダA1型乗用車：初めて走行することのできたトヨタ自動車の一台目。

編集後記

新聞部をｓｗｉｔｃｈする。僕は家でｓｗｉｔｃｈをする。　伊藤丈

部員が増えて部室や取材旅行など賑やかでいいなと思いました。　加藤

今年は新聞部も世間も「どったんばったん大騒ぎ！」の一年でした！　伊藤翔

体育祭の担当なのに体調不良で倒れてしまいそうでした。　齊藤

今までで一番時間がかかってしまいました。頭がぴょんぴょんしてもう大変！　野口

初めての取材旅行でとても楽しかったです！また参加したいし、次は文章を書きたいです。　淺沼

取材当日は雨が降っていましたが、より交流が深められたと思います。また行きたいです。　戸田

論説、苦戦致しました…。普段から色々な事に興味関心を持ち、発見し続ける事が大切ですね。　宮崎

今回で二回目。作業にも慣れてきました。　木野

二回の取材を通して記事を書く楽しさや難しさを感じました。　大牧

取材は行けませんでしたが、初めての記事作りは楽しかったです。　大森

『西高新聞』を一緒に作りませんか！特に、1年生を大歓迎。兼部でもOK。